

北岳バットレス敗退＋白根三山往復

NO1

2014.9.5-6



バットレス登攀予定の朝、「午前中は晴」という予報もむなしく雨がはげしい。6時を過ぎたが止む気配は無い。先輩OB2人は相談の結果、今回は諦めもっと天気の安定する9月末から10月に再来することにしたと言明。岡山県人としては明日まで待ってはどうかとは思いますがこれだけの雨を前にすればそうも言い出せない。これで2008年以来追いかけて来たぼくのバットレスは終わった気がした。「ではとにかく白根三山に向います」と宣言して2人と別れ6時半に小屋を出た。草滑りを一気に駆け上がり2時間で稜線、更に30分で北岳の頂上に着いた。しかし暴風雨とも言って良い激しい風と雨が続いた。



白根御池小屋の豪華な朝食。塩シャケと太巻き卵が出る。

北岳の頂上ではバットレスから登って来る稜線が辛うじて見えるが下から登れる状態ではない。



8:32



7:26



オンタデ



ヒメコゴメクサ



ガスで足元の花や道標くらいしか見えない。時折氷粒混じりの突風が吹いて立ち止まらなくてはならない。さすが3千mの稜線、まばらに見える他の登山者も苦労している。それでも装備のおかげで耐えられるのはありがたい。霧の中で間の岳がなかなか現れない。北岳小屋から2時間ほどかかった。





間の岳南面の2重稜線は憧れの地だ。鞍部近くのモレーン地帯のあちこちに岩のかけらの小山や壁がある。かつてここにあった氷河の仕業だが、形は見事でまるで人間が積んだように見える。2重稜線が顕著なこの一帯は正に氷河公園。できればテントを張って一夜を過ごしたいくらいだ。しかし、残念ながら雨が降るばかりでそれどころではない。





氷河遊園地の小山や石壁の様子にひかれ立ち止まって写真を撮り、歩き出してほどなく、右手の小山の上にアンテナの様なものが見えた。農鳥小屋が近い。小さな坂を登ると突然目の前に赤い屋根の建物群が現れた。ガスボンベが転がり、水のタンクが並び、奥の小屋の壁には黄色い字で「ウツケ」と書いてある。これはまぎれもない人間世界だ。近づけば「ウツケ」ならぬ「ウケツケ」と読める小屋の脇を奥へ進むとやや大きな建物がある。12時半とまだ早いもののこれだけ濡れるとさすがに小屋に入って雨宿りしたくなる。靴の中もびしょぬれだ。重い引き戸を開けると中には思いがけず大勢の登山客がいて、ストーブのまわりで濡れものを乾かしている。ほんの少し前に到着したらしい。



さてここでどうすべきか？ 騒然とした小屋の雰囲気に気圧されながら、登山客に盛んに「ああせえ。こうせえ」と指示している小屋番に「あの一」と声をかけた。その時には次の言葉は決まっていなかった。小屋番はこちらを向き、一体何しに来たのか？と言う様なひどくうさんくさい顔でこちらを眺めまわした。途端にぼくの口からは「今夜泊めていただけますか？」と考えてもいかなかった言葉がもれた。まだ12時半という時間からすれば次の大門沢小屋までは十分下れる時間だ。しかし、





しかし、ぼくはこの小屋に突然大変な興味を持ってしまった。昨夜の白根御池小屋には無い古さと山小屋特有の何か殺気立った雰囲気。泊まってこれをじっくり体験しないわけには行かないと本能が勝手に決めた。そのせいか、「泊めていただけますか？」などと言ってしまった。それを触発したのはぼくとは同い年くらいの小屋番の異様に高飛車な殺気立った態度だった。「じゃあ、服を干したりして落ち着いたらあとで手続きしてやるよ。こたつもあるからあたんなよ」。てきぱきとした指示が飛んだ。今夜ここに泊まることにしたのは正解だ。この頃よくあるが事を起こす前にはおよそのことしか決めない。その時、その場になって「どうだ？」と自問し、その時点の自分の反応を見るてそれに従う。この日もその伝だ。白根三山を縦走してしまうとは決めていなかったがここまで飛ぶようにやって来た。ここで泊まるとは決めていなかったが泊まることにした。リタイアして9時～5時のタイムテーブルを放棄することにしたが、それは具体的にはこう言うことなのかもしれない。



板敷きにごぎ。真ん中にこたつとストーブ。壁際に合計最低25人ほどが布団を敷ける20坪、70㎡ほどのスペース。先客は神戸から来たと言う13名のシニアグループとその他5名。「あとから来た人をこたつに入れてやんなよ！」との小屋番の一声でこたつに潜り込ませてもらって暖をとる。誰がこの小屋の主人であるかをはっきりさせる言葉だ。皆飼犬の様にそれに従う。





「天気は今日は悪い。明日はいいかもしれない。だから今日ここで泊まったのは軟弱だがいい判断だ。ところでラジオを持っている人はいるか？ 誰もいない！ そんなことじゃあ天気も分らんぞ。それで山に来ていいのか？ いかんぞ！ 夕食は5時」。言いたいことだけ言うと小屋番は姿を消した。泊まり客は凶星をさされて苦笑いしつつ互いの距離は一気に縮まり、小屋の中は共同体の雰囲気にも包まれる。

5時までは大分時間がある。そう言えば学生時代の合宿では1時頃にはテント場に着いてあても無くのんびりしたものだ。いつの頃から夕方までがつがつ歩くようになったが。折角の機会なので小屋の周囲を見て回る。まずは西側に築かれた防風のための石垣の脇から全体を眺める。バケツ、なべ、タンク、ドラム缶、、、貯水用の器具が異常に多い。それだけ稜線上では水が貴重なのだろう。そしてプロパンガス。さすがに薪ではしのげない。



さらにはトタン板囲いの小屋の数がやたらに多い。それぞれどんな機能なのか？最初ここに来た折には左端の「ウケツケ」と書かれた小屋と中央の赤い小屋の間の通りを進んだ。ということは奥のやや背の高い建物が宿泊客の寝起きするいわば本館だ。であれば、「ウケツケ」と書かれた小屋は小屋番の事務所。その反対の赤い小屋はさしずめ食堂ということか。赤い小屋の角のドラム缶の上にはひよろ長い、やせこけた大根が置いてあった。では、それ以外の小屋は何なのか？



西側の石垣の上に登ってみる。霧でよく分からないが小屋は屋根だけで9軒ほども見える。一番手前の小屋は本館に次ぐ大きさだ。勝手に戸を開けてみると本館と似た様な板敷き、ごぎの広間が広がっている。ということはこれは本館満員時の第2本館ということか。ここに20人泊まるとすれば、農鳥小屋全体では最低50人は収容できる。それはでかい。この極地では建物は小さく沢山と言う方針か。



石垣と小屋の間にヤマハコが群生している。風が遮られるのでこれだけ見事に育ったのだろう。



石垣の西側に出ると獣用のかなり大きな罠が仕掛けられている。テンとか狸がいるのだろうか？ 獣を捕まえた小屋番が喜ぶ姿が見える様だ。



左はあまり聞いたことは無いがミヤマゼンコと言うらしい。セリ科の仲間だと言うがとても大きい。お馴染みのチシマギキョウは雨に打たれてすっかりうなだれている。



およその全体を把握した上で本館通りに戻る。戸の閉まった本館を正面に見て手前右手が食堂、左手が小屋番事務所。その間を通り、本館の前を左に曲がると右手にステンレスの洗面台、左手にトタン板造りのシンクがむき出しで置かれている。言わば青空洗面、台所。そこにも水をためるためのナベ、バケツ、タンク、ドラム缶が目白押し。



食堂の入り口が開いて泊まり客が中を覗き込んでいる。今日は一体何が食べられるのか？ ドヤ街を思わせる様な雰囲気皆やや心配そう。



青空洗面、台所を抜けて本館の東側に出てみる。そちらにも低い石垣があり本館を保護している。冬の猛吹雪の折にはすっぽり雪に埋まるのだろう。屋根の端は雪の重みのせいか折れてひしゃげている。



農鳥岳への登山路が始まる所に「売店」と書かれた看板のかかった小屋がある。そこでおみやげでも買ってもらおうと言う魂胆だろう。中には女の子の売り子がいたのかも知れない。しかし、今や窓は釘付けになり、明るく華やかなにぎわいは無い。その右手奥には寝具を詰め込んだ倉庫がある。



これだけの規模になるとトイレが気になるが、東側の斜面上に2棟ある。現在は手前の小屋だけを使っている様で中には小部屋が2つ。穴の下に滑り台があり、ものはそこから下の斜面に滑り落ちる垂れ流し。環境問題のうるさい現在、これでいいのかとも思うが、施設全体のバランスからすればこれこそが適正機能だ。

あちこちにソーラーライトが設置されている。何の役に立つのかと思ったが、夜中トイレにたってその威力を実感した。



ここではものは下に落ちるばかりでなく強風に煽られて舞い上がって来る場合もありそうだ。しかし、とてもシンプルで匂いも無く、気持ちが良い。トイレ右手にかけたビニール袋が使用済みトレペで一杯になっているのが気になったが。



小屋沿いの道の前後に手作りの道標、中央に小屋の看板。風雪に消されて幾度か上塗りした赤や黄色の文字。霧の中ではこんな色でなければ見えない。ガムテープで補強したソーラーライト。闇の中で救いになる。どちらに向うにも大きな山を越えなければならぬ緊張感に溢れた場所だ。

あたりを一回りして本館へ戻りしな小屋番事務所をのぞく。小屋番と犬が3匹暖をとっている。小屋番は所在なげに腰掛けてあっちを見やり、斑模様の犬の頭が勝手にのぞくなど唸り声を上げて威嚇する。よく見ればこれこそ一代一主を貫くことで有名な忠実な家庭犬、かつ信頼できる番犬、そして万能の猟犬である天然記念物の甲斐犬だ。



探索の結果この小屋は大小11棟の建物と小屋番1人と犬3匹で運営されているものと判断された。やれやれ人間はこんな山奥にとんでもないものをつくるもんだ。

12時半から5時まで。長い時間を持て余すかと思ったがあっという間に過ぎた。そしていよいよ夕食。

食堂は入って右手がキッチン。まな板、ガスコンロ、大ナベが主役。

左手が食堂、3～5人用の小さなちゃぶ台が4つ。正にネパールの街道沿いの宿だ。小屋番はいつの間に食事を作ったのだろう。料理する様な顔はしていない。誰か別に炊事係がいる様な気がするが、誰もいない。





天上が剥き出しで小屋の骨組みが見える。野呂川の奥に入っていた木こり達の住んでいた小屋と同じ造りなのだろう。



総勢18名が座るといささか狭い。しかし得難い親密感を感じられる。



メニューは野菜と茸、高野豆腐の煮付け、佃煮、漬物、飯とわかめのみそ汁。現代風のものはいっさい無い。しかし食べてみれば全て山を歩いて来た胃に優しい。この高度でありながら飯は立派に炊き上がり、煮干しのだしのみそ汁は絶妙な塩加減だ。これもかつて一帯を仕事場にしていた木こり達のメニューにちがいない。



ここでふと昨夜の白根御池小屋での夕食風景を思い出した。
どこかの企業の社員研修所の食堂に何ら遜色無い。
そこに50人近くが集合、一斉に食事をする。
2200mの山中にいると言う気は全くしない。
そのせいか2食付き1泊8300円。
夕食のおかずはいろいろな物が重箱にきれいに収まっていて
まるで花見気分。ジョッキで生ビールを飲んでいる人もいた。





と、あまりの違いに呆然としながら農鳥小屋に戻る。皆さんの食欲は実に旺盛。飯もみそ汁もお代わり続出。全てが実にすんなりと胃に収まった。そして食事はわずか15分ほどで終了。御馳走様。





その間小屋番は宿泊客の食事の様子を危なっかしそうに見守っていた。食欲の無さそうな、調子の悪そうな客がないかを見ていたのだろう。全員満腹、満足の態で食堂を出ると小屋番は出口で思いがけない笑みをこぼした。
突然「おいっ、わすれもんだぞ！」と怒声が響いた。びくっとして振り返るとぼくのカメラケースがちゃぶ台の下に転がっている。ああしてやられてしまった。





夕食は終わった。1泊2食で7千円。なかなかの値段だがテント泊では自分の殻に閉じこもるばかりで小屋番が半生かけて作ったこの世界は楽しめない。その観覧料と思えばいい。毛布は一人当たり実に4枚。それでも寒そうな予感。「8時には消灯だぞ！」と小屋番は言っていたがその前に寝こんでしまった。





3時半、目覚めてトイレに立つ。昨夜の8時前からもう8時間近く寝ている。小屋を出て空を見上げて驚いた。満天の星空だ。そして下には雲の合間に甲府の夜景が広がる。昨日は霧の中で何も見えなかったがこんなに近かったのだ。暴風雨の中をここまでやって来て、しかもここに泊まった甲斐があったと言うものだ。小屋に戻って今日どう動くかを考える。大門沢に下るのが順当だろう。しかし、それでは農鳥を越えればただちにこの高みと分かれることになる。では昨日、一昨日と同じ道をもどるか？ 時間的にはどちらも似た様なものだが再び天候が悪化すれば稜線に戻る方が遥かに厳しい。結局、農鳥岳まで登ってそこで判断しようということにした。山の専門家からすれば昨日来、全く危なっかしい行き当たりばったりの歩き方をしているということになるだろう。





小屋番は昨夜「明日は天気が良いから早立ちのために朝食は4時にする」と言った。その時点ではこんなに見事に晴れるとは思ってもいなかったがさすがだ。

4時前に荷物を整理し食堂へ。メニューは佃煮、漬物、梅干し、海苔、飯、みそ汁そして何と生卵一人一個！一体どこから誰がこれだけの卵を担ぎ上げているのか？小屋泊まりの経験は少ないがこんなに深い山の上で生卵が出る小屋と言うのはそうは無いだろう。おかげで食欲が湧き、元気が出る。食べ過ぎないように飯は1杯に抑えてじっくり味わい、みそ汁はお代わり。

朝食はとらずに4時に出発した人がいたがそれを追って4時15分暗い中を出発。照れくさいような気がして小屋番には挨拶しなかった。同年代でこんな人生を生きて来た者もいるのだ。ここに泊まって実に良かった。